

第7回「土地と力」シンポジウム

発表

鶴岡真弓 所長（芸術文明史家）

平出 隆 所員（詩人・作家）

港 千尋 所員（写真家・映像人類学者）

安藤礼二 所員（文芸評論家）

榎木野衣 所員（美術批評家）

コメンテーター

金子 遊（批評家・映像作家）

芸術人類学のめざすもの

交点の空間と時間



会場 多摩美術大学 八王子キャンパス・レクチャーホールB

日時 2019年11月16日(土) 開演14:00(開場13:30)

時間



空間の交点

芸術人類学のめざすもの

人間は、時間と空間を認識することで初めて人間となった。そして、時間と空間が一つに交わる場所に、種族の記憶の表現であり個人の記憶の表現でもある芸術作品を残してきた。自然との相互作用のなかで、自然に対して果てしない畏怖と敬意を抱きながらも、そこにもう一つ別の世界の可能性を切り拓いてきた。芸術の発生を広大な人類史のなかに位置づけ、さらには現代の芸術のもつ可能性までも俯瞰する。生命と環境、場所と記憶、理論と実践……。芸術人類学研究所がこれまで開催してきた「土地と力」をめぐるシンポジウムの一つの総括として、芸術人類学が実現を目指してきたもの、さらにはその未来までも徹底的に論じ合う。

写真撮影：港千尋 表面・裏面：台湾・金門島 2018年

お問合せ：多摩美術大学 芸術人類学研究所
 192-0394 東京都八王子市鎌水2-1723
 電話：042-679-5697 Email: iaa_info@tamabi.ac.jp
 URL: <http://www.tamabi.ac.jp/iaa/>
 アクセス情報：<http://www.tamabi.ac.jp/access/>

登壇者プロフィール

鶴岡真弓

芸術文明史家。多摩美術大学芸術人類学研究所長、教授。ケルト芸術文化・ユーロ＝アジア民族デザイン交流史を軸に、西はアイルランド、東はシベリア・日本列島に至る「生命デザイン」を追跡中。著者に『ケルト／装飾的思考』『ケルト美術』『装飾する魂』『京都異国遺産』『ケルトの歴史』（共著）『ケルト再生の思想 — ハロウィンからの生命循環』『ケルトの想像力 — 歴史・神話・芸術 —』『装飾デザインを読みとく30のストーリー』『ケルトの魂』など多数。

平出隆

詩人、作家。多摩美術大学図書館長、教授、芸術人類学研究所所員。その詩は散文との重層領分に及び、『胡桃の戦意のために』『ベルリンの瞬間』『私のティアガルト行』など多数。国際的ベストセラー小説『猫の客』は、22ヵ国語に翻訳。昨年度開催の「言語と美術 — 平出隆と美術家たち」展（DIC川村記念美術館）では『via wwalnuts 叢書』や『ppripo』などの実験的刊行物も展示。

港千尋

写真家、映像人類学者。多摩美術大学教授、芸術人類学研究所所員。芸術の発生、記憶と予兆、イメージと政治などをテーマに、制作と研究を続けている。著書に『記憶 — 創造と想起の力』『洞窟へ — 心とイメージのアルケオロジー』『芸術回帰論』『ヴォイドへの旅』『書物の変』など多数。最新刊に『風景論 — 変貌する地球と日本の記憶』『インフラグラム — 映像文明の新世紀』。

安藤礼二

文芸評論家。多摩美術大学教授、芸術人類学研究所所員。大学時代は考古学と人類学を専攻。出版社の編集者を経て、文芸評論家として活動。著者に『神々の闘争 折口信夫論』『光の曼陀羅 日本文学論』『折口信夫』『大拙』『列島祝祭論』『迷宮と宇宙』『近代論 危機の時代のアルシーヴ』、編訳書に井筒俊彦『言語と呪術』など多数。

樺木野衣

美術批評家。多摩美術大学教授、芸術人類学研究所所員。1991年に最初の評論集『シュミレーションニズム』を刊行、他に『日本・現代・美術』『爆心地』の芸術』『反アート入門』『後美術論』『震美術論』など多数。最新刊に『感性は感動しない』。福島県の帰還困難区域で開催中の「見に行くことができない展覧会」、"Don't Follow the Wind"では実行委員も務める。

金子遊

批評家、映像作家。多摩美術大学准教授。著書『映像の境域』でサントリー学芸賞（芸術・文学部門）受賞。他の著書に『辺境のフォークロア』『異境の文学』『ドキュメンタリー映画術』『混血列島論』『悦楽のクリティシズム』がある。共編著に『クリス・マルケル』『アピチャポン・ウィーラセタクン』、共訳書にティム・インゴルド著『メイキング』、アルフォンソ・リングス著『暴力と輝き』など。



会場 多摩美術大学八王子キャンパス・レクチャーホールB
 日時 2019年11月16日(土) 開演 14:00 (開場 13:30)
 入場無料・事前予約なし(一般の方は先着順でご入場いただき、満席の場合は立ち見となります)

